



あたしと強盗さん の奇妙な同居生活



如月ひまわり

“あたし”はなぜか突然押し入られた強盗と共に生活することに——！？

——あたしはなぜか、ありえないくらい危機的な状態にいた。胸元の数ミリ先でとまっている、光をうけて鈍く輝くナイフ。果物ナイフ程のサイズのそれは、小さいとはいえ刺されてしまえば大怪我になり兼ねない物だ。

突然押し入られて僅か数十秒。あたしはあっという間にこうして壁に押し遣られている。壁にへばりつくように、必死にナイフと距離をとろうとするが、そんなことが無駄だということは最早わかりきったことだ。

一言、覆面をした強盗は低くハスキー声で「静かにしろ」と言ったきり、なにも言わずにこうして睨みつけてくる。周りの空気が張り詰めていて、肌をピリピリと刺した。一瞬でもプツリと切れてしまえば、次の瞬間あたしは殺されているかもしれない。

あたしは恐怖でうまく思考が回らないまま、逃げろ、と手足に向かって信号を送る。手足には確かに届いているはずのその信号は、ピクリと僅かに指先を、つま先を震わせただけで歩くこともままならなかった。壁と密着している背中は、冷や汗でじっとり濡れている。

突然強盗がナイフを数センチ下げた。へ？ と驚きのあまり間抜け面をしたあたしは、その逃げられるかもしれない僅かな貴重な時間を、頭の中に浮かんだ「なんで？」という言葉だけでみすみす逃してしまった。

だって、強盗が自分から逃げるように仕向けるなんて、明らかにおかしい。実際に強盗に会ったのは初めてだけど、そんなお馬鹿とも言える失態を犯した強盗は聞いたことがない。

そんな思考が一気にぱっと頭に浮かんだ瞬間、あたしは強盗の二言目を聞いた。

「後ろ向け」

恐怖で竦んでいるはずのからだをぎくしゃくと動かし、後ろを向く。一気に刺されたらどうしようという不安が大きくて、あたしはそれ以外の考えは全くと言っていいほど浮かばなかった。頭の中が真っ白になる状態って、こんなものか、とどこかの冷静な自分が言う。

手首に何かが触れて、ビクンと大げさなくらい跳ねてしまった。ドキドキする心臓を必死に静め、しばらく緊張で溜まっていた空気を大きな溜息として吐き出す。見えないけれど、きっとビニールテープか何かで拘束されている。動けないようにするためなのだろう、そんなことしなくたって怖くて動けないのに。

ぐるりと体を回転させて、あたしをソファに引っ張っていくと、乱暴に座らせる。そうして強盗は、上から睨みつけるようにあたしを見た。

「金はどこにある」

「……ヒッ……あっ、ありま……せん」

突然たずねられて変なシャックリを漏らしながらそう答えると、強盗はふんと馬鹿にするように鼻を鳴らした。

「嘘をつくな。財布はどこだ」

「友達の家に……忘れてきました」

嘘ではなかった。昨日たまたま高校時代の同級生数人で飲んでいて、そのときに忘れてきて

しまったのだ。幸い携帯はポケットに入っていたので大丈夫だったが、明日にでもとりに行かなければならない、と思っていたのだ。

「預金通帳はあるだろう」

確かにある。だが貧乏OLの預金通帳に一体いくら入っているというのだ。まだこうして一人暮らしを始めて三年にもならないというのに。

「あ、りますけど……少ししか……」

上目がちにそういうと、案内するよう立たされてナイフを突きつけられた。喉の奥から乾いたようなヒューヒューという音がする。

電話台に使用している棚の近くまでそろりそろりと、まるであたし自身も泥棒だか強盗だかになったようにそっと歩いた。時々脅すようにナイフの峰を背中に押し付けられ、泣きそうになる。とっくに目は決壊寸前だったし、気を抜けば涙を流すどころの話ではなくなってしまう。——多分、泣きながら発狂してしまうだろう。そうなった時に逆上した強盗があたしに襲いかかってきたら、あたしは一貫の終わりだ。まだかろうじて残っている正常な感覚が、あたしにそう告げていて、だからあたしは必死になって涙を流すまいとしていた。

ぷるぷると震える足と、走ってもいけないのにゼイゼイと乱れる呼吸。静か過ぎる部屋に私自身の呼吸音と強盗の靴下が床を擦る音だけが響き渡っていて、何だかそれはとても不気味だった。

きっと狭い部屋の中だから二メートルもないはずなのに、棚までの距離を歩いた後の状態は高校以来やっていないマラソンをしたみたいだ。歩かされる内にただでさえかなりの量が流れていた汗が、更に増えたように感じる。首元や額には、べっとりと髪がくっついたままで気持ち悪かったけれど、それを拭う勇気などあたしにはなかった。

「ここか」

コクンと頷く間もなく、強盗は縄を片手に持ったまま棚の中の物をぶちまけ始めた。

呆然とそれを眺めていく内に、棚は一段二段とだんだん抜き取られ、あっという間に四段抜き終わった強盗は、床にかがみ込んでぶちまけられた物をごちゃごちゃとかき回す。

基本的に綺麗好きなあたしの部屋の中、ぶちまけられた書類やら文具やら薬なんかは、異様な雰囲気放っていた。

今なら逃げるチャンスはある。

無防備な状態でかがみ込んでいる強盗に、思いっきり蹴りをくらわせればいいだけのこと。

——確かに出来るはずなのに、なぜかあたしは動けなかった。

相手は刃物を持っているのに、ただでさえ弱いあたしが縄を掛けられてそんなアクションを起こせるはずがない。

涙目になりながら強盗を見下ろして、ぼーっと突っ立っているだけだ。情けない、のかもしれない。だけど、あたしには無理だ。

そうやって自分の情けなさを噛み締めていたら、強盗は預金通帳を見つけたようだった。開いて、絶句するのが雰囲気であってしまった。そしてしばらくして肩を一瞬震わせると、いきなりすくっと立ち上がった。

「ひっ……」

あまりの少なさに怒った強盗が、今度こそ私を刺すんじゃないかとびくっとして目を瞑る。数秒たったが、何も衝撃を感じない。恐る恐る目を開けると、強盗は目の前に立っているだけだった。

「お前、こんだけ？」

「はい……」

ただでさえ少ない給料で、しかも今は月末なのだから仕方ない。項垂れていると、強盗が小さくため息を吐くのが、覆面の布越しにくぐもって聞こえた。

「金ないんだったら仕方ないな。俺はここに住むから、お前養え」

「……はい……ってええ！？」

恐怖でただ頷いて返事を繰り返していたあたしは、返事をしてから思わず顔を上げて強盗を凝視してしまった。先ほどの恐怖とは違う意味で、顔から血の気がひていくのがわかる。

「……えっと、それって……あたしの家に住む？ あなたが……？」

思わずわかりきっている返事を聞き返してしまって、強盗は露骨に目をぎろりと動かす。その目を見て、あたしはやばい、と焦る。——この人が強盗だってこと、忘れていた。

「何度言わせるんだ。お前の家に住むから、養えと。逆らうなら——」

途中で言葉を切り、ナイフを首元に当てられる。首に鉄の冷たさを感じて、あたしの体は再びじっとりと汗を掻き始めた。やっと正常になったと思った心臓も、またドクドクと早く波打ち始める。

「わっ……わかりました。……わかりましたから……ひくっ、早く離して下さい」

必死に搾り出した声は裏返って、掠れてしまう。それでも強盗は満足そうに頷くと、ナイフを首元から外し、縄を切った。縄が外れたお陰で、窮屈な体制を強いられていた腕の力が抜けた。強盗はナイフを仕舞うと、覆面を何の躊躇いもなく外す。

——そんなに簡単に、顔見せていいの？

思わず呆れて出そうとした声は、強盗の素顔を見て喉元で止まってしまった。

強盗は——少年だった。

十六歳か十七歳くらいだろうか。やっと男らしさを漂わせ始めた顔は、強盗をしそうな人間にはとてもじゃないけど見えなかった。

呆然として声も出せないあたしを不思議そうに一瞥して「水」と一言呟いた。

「水？ ——ああ、はいはい」

少年じゃない、と一瞬肩の力が抜けて、あたしは慌てて顔を引き締めた。ナメられてる、なんて思われたら何をされるかわからない。

台所に向かい、戸棚からコップを取り出す。蛇口から溢れるように零れ出た水は、なぜだかあたしをホッとさせた。

ソファにどっかりと座った少年の前にコップをおき、後ろを振り返った。台所の入り口の前には、書類や救急道具などが無残に散らばっている。

小さくため息をついて、屈んでそれを拾う。引きぬかれた棚に、丁寧にそれを入れ終わると、立ち上がって時計をちらりと見た。時刻はもう四時半を指している。

「何か、食べますか？」

年下に対して敬語を使うのはなんだか違和感を覚えるけど、間違って神経を逆なですて、脅されてもたまらない。違和感を抑えつけて、あたしはそう尋ねた。

水をすごい勢いで飲み干した少年は、こちらをちらりと見ると「なんでもいい」と小さく呟いて、テレビのスイッチをいれた。静かだった部屋に、テレビの騒音が満ちる。

何でもいい、が一番困るってこと、知らないんだろうか。小さくため息をついて、台所へ向かう。冷蔵庫の中には、納豆、鶏肉、卵、玉ねぎ、調味料……。週末だし月末だし、そんなにたくさんの食料が入っているわけでもないのに、あたしはさっさと済ませてしまおう、と思う。

鶏肉と卵と玉ねぎを使って、親子丼を作った。黙ってテレビを見る無愛想な少年の前に、コト
ンとまだ湯気のとつ親子丼をおくと、少年はようやく視線をテレビから外す。

「ありがとう」

小さく呟いた言葉に、不覚にもあたしはドキッとしてしまった。——お礼、言えるじゃん。

やはり食べ盛りの少年だからなのか、マナーのマの字も知らぬ、凄い勢いで掻き込んでいる。
まずくないと、いいけど。誰かに作ってあげたことなんてそんなにないなあ。

向かい合ったテーブルのこちら側でゆっくりと食べていると、ふいに少年が目をあげた。

「おかわり、ある？」

「……もう食べたんですか？ ありますけど……貸して」

思わず呆れてそう言って、あたしはおかわりを注ぐ。

それから三杯、四杯とスピード衰えることなく食べた少年に呆れつつ、茶碗洗いを済ませて、
一息ついた。

*

お風呂から出ると、少年はまだ黙ってテレビを見ていた。そういえば、名前を聞いていなかったな、と髪を乾かしながらふと思う。

「あのおー……名前なんて言うんですか？」

相変わらず敬語は直らなくて——というより直せなくて、あたしは小声でそう窺った。

「……観音寺伊吹（かんのんじいぶき）。お前は」

変わった名前だね、と言おうとしたけれど、それを遮るようにあたしの名前も尋ねる伊吹くん。

「あたしは——山辺未帆（やまべみほ）。伊吹くんがいいかなっ」

独りごちるようにそういったあたしの言葉に返答はなくて、あたしは勝手に伊吹くんと呼び始めることにした。

しばらく少し離れたところで一緒にテレビを見ていると、伊吹くんが欠伸するのがみえた。今何時だろう、と時計を仰ぐと、時刻はもう十一時。あたしは夜型だからそんなに苦痛には感じ無いけれど、もしかしたら眠いのかもかもしれない。

「眠いなら、もう電気消しましょうか？ ベッドのかわりに椅子で寝てもらうことになりますけど」

「お前より先に寝たら、どうせ警察に通報すんだろ」

ドラマの「その手にはひっかからないぜっ」を漂わせる伊吹くんの声のトーンに、あたしは思わず苦笑いした。今の今までそんなこと思いつきもしなかったのだ。だってこのまま、少なくとも一週間は一緒に暮らさなきゃいけない、そう腹を括っていたから。

——というよりは、久しぶりに誰かと一緒に暮す、ってことに、ワクワクしている自分もいるのかもかもしれない。

「大丈夫、通報なんかしないです。なんで伊吹くんが突然あたしの家に転がり込んできた——強盗しにきたのかはわからないけど、少なくとも一週間くらいなら一緒にいる覚悟はできてるので。それとも夜型のあたしとどっちが先に寝るか張り合う気ですか？」

冗談めかしてそう言っても、伊吹くんは何も言わない。でも立ち上がりもしないし、欠伸を噛み殺しているのを見ると、どうやら張り合う気らしい。

一応、毛布でも用意したほうがいいかなあ。

押入れから友達が遊びに来たとき用の毛布や枕なんかを引っ張り出し、ソファの上にひく。ソファは男の子が寝るには少し小さいけれど、我慢してもらうしかない。敷き布団なんかはさすがに用意してないし。

ソファにひいた布団の上に腰をおろし、あたしは携帯を出した。

時刻が進むにつれて面白くなるテレビ番組は眠気を誘い兼ねないし、ぼーっとしてるなんて言語道断。一番いいのはいくらでも情報があるインターネットをすること。あたしはお気に入りのケータイ小説サイトを開き、栞を挿めてある恋愛小説を読み出した。

一章読み終わったところでふと顔をあげると、伊吹くんは間隔の狭い欠伸を必死に嘔み殺し、テレビを凝視し続けている。この勝負、あたしの勝ちだな、とひとりほくそ笑んで、あたしはもう一度携帯に目を落とした。

夢中になったあまり、一章どころか三章も読んでしまい、気づけば時刻は一時をさしていた。慌てて伊吹くんを見ると、膝を抱えるようにして寝ている。スースーという小さな寝息も聞こえてきて、あたしは思わず少し笑う。

強気だったとはいえ、やっぱり少年だ。

せっかく寝始めた伊吹くんを起こすわけにもいかず、テレビの前の狭いフローリングに枕を置き、伊吹くんを寝転がせた。

思わずじい、と顔を見てしまう。今時の女の子にモテるような顔ではないけれど、キリッとした眉とかキュ、としまった唇とか、顔立ちは可愛らしいのだ。

気づけば結構長いことその顔を観察しているあたしに気がついてしまって、あたしは慌てて毛布を被せる。そうして、電気を消してあたしもすぐに布団に入った。

目玉焼き、二つ。ご飯も、二杯。

今まで一人暮らしで、彼氏だって二年前に別れたきり、誰とも付き合っていなかったあたしにとって、自分の分以外のものを作るのはすごく新鮮だった。

今まで適当に済ませていた朝御飯も、少しだけ気合をいれて作る。

テレビの前に二つを並べ、相変わらずフローリングで熟睡している伊吹くんをちらりと一瞥する。時刻は七時半。そろそろ仕事へ行かなければいけないので、急いでご飯をかき込むと、メモを残す。ご飯にもラップをかけて、あたしは家を出た。

「おはよーございます、山辺先輩」

「おはよう」

会社までの道のりを歩いていると、横に並んだ柵野貫太（つがのかんた）が気の抜けた声でそう言った。柵野貫太はあたしの後輩で、どこか抜けた、おっとりとしてる新米の社会人である。あたしよりひとつ下、ってだけなのに、なぜか凄く丁寧な話し方をする。どんな先輩にも敬語を使ったり、よく気が利いたりするのに、どこか放って置けなくなるような雰囲気をもっている柵野は、先輩の女性社員から絶大な人気を誇っていた。顔は、中の下、というところで、あまり良いとは言えないのだけど。顔が性格そのもののようなおっとりとした感じのためだと、あたしは思っている。

「昨日部長から頼まれた資料なんですけど、ちょっと確認してほしいことがあって……見てくれませんか？」

「いいけど、あたしにもわかるかわかんないわよ」

慌ててそう言うと、あたしは思わずため息をつく。

入社した次期だってたった一年くらいしか変わらないのに頼りにされるほど、あたしは同僚の中でずば抜けてもいない。

ごそごとと黒い革のバッグから資料を取り出すと、形の良い爪で大量の文字列の一部を刺す。

「ここなんですけど……」

隣で説明を始めた柵野の話をうんうん、と聞き流しながら、あたしはぐうん、と空を見上げた。快晴ではないけれど、ビルの間から垣間見える白い雲と青空は結構気持ちいい。

北海道から遊びに来た姪は、その空気の汚さに、田舎育ちの自分には合わないね、って笑って帰っていったけれど、そうだろうか。

東京ぐらしも慣れてくると麻痺するのもかもしれない。どうやら姪は鼻をかむと排気ガスで鼻水が黒くなるのをみてびっくりしたみたいだけれど。

——と、意識をどこかに飛ばしていたら、突然肩を強く叩かれて、あたしは少しよろけてしまった。

「ちょっと、聞いてます？ 山辺先輩」

「えっ、あー……聞いている！ うん、聞いているよ。で、なんだっけ？」

「もー聞いてなかったでしょう。いいですか、もう一度いうから、今度こそはちゃんと聞いてて下さいねっ」

呆れたようにそう言うと、今度はあたしがちゃんと聞いているかどうかチラチラと確認しつつ進めてくる。

そんな彼を可愛いなあ、なんて思いつつ、またあたしは意識を飛ばしてしまっていた。

伊吹くん。なんだか可愛いところを発見してしまって、気が緩んでいたけれど、あの子は立派にも(?)我が家へ強盗として突撃してきた身なのだった。そうしてあたしは拘束され、脅され、お金を奪われそうになったのだ。

あの時の恐怖と云ったら、今でも思い出せば冷や汗モノだけれど、それでもなぜなのか、伊吹くんの居候を快く許しているあたしがいた。だって、今からでも通報することは可能なのに、自分でも不思議なくらいそんなことは思わない。。もし通報したら、伊吹くんは押し入った家に居候しようとしたおかしい強盗として、世に知られることとなるだろう。

「せんぱーいっ！」

「きゃあっ!？」

耳元で突然声が聞こえて、あたしは思わず飛び退いて、耳をふさぐ。

「な、なによ……」

取り繕うように笑顔を見せてみても、柁野の怒ったような顔は変わらない。

かと思うと一転、心配そうな顔になった。

「どうしたんですか？ 先輩が一度ならず二度までも、意識がどこかにいってるなんて」

本気で心配そうな柁野になら、なぜだかあたしは話してもいいような気がた。別に悩んでいるわけでもないんだけど、その柁野の本気で心配そうな顔を見ていたら、なんとなく脅してやろうかなんて気分になっただけだ。

「実はね……」

声を潜めるようにそう言うと、梅野の顔に緊張が走るのがわかる。

「せっ、先輩、俺でよかったら、力になりますんで」

まだ何も言っていないのに、そんなことをいう梅野が可愛くて、少し笑いかけた。

「あたしの家、昨日強盗が入ったの」

「……え？ ごうとうって……強盗って、モノを盗む強盗？」

「ソレ以外になにがいるのよ」

さっと血の気が引いたような顔の梅野を宥めつつ、あたしは周りを見る。念のため——知り合いなんかに聞かれて広められては困る。

「でね、お金——」

「お金もとられたんですか！？ 通報したんですか！？ なんて騒ぎになってないんですか！？」

「えっ、ちょ、待って。問題はそこじゃないの」

一旦言葉を切ると、あたしはとびっきり声を潜めて言う。

「あたし月末でお金なかったから、その強盗と一緒に住むことになっちゃって」

「住む？ え、強盗って男ですよ？ え、家に……？」

パニックに陥った様子の梅野に、うん、と頷くと、梅野は本当に真っ青な顔になった。

「先輩……意外と神経図太いっすね……」

泣きそうな声でそう言うと、項垂れてしまう。あたしは苦笑して、内緒ね、と呟いた。真面目な顔で頷いたのを確認し、もう目前の会社に行くため、ふたりとも無言になった。

仕事から帰ると、部屋は真っ暗だった。生活するというのだから、まさかまだいなくなったりしないだろうと思いながら、そっと部屋を覗く。

テレビの前のフローリングにはまだ毛布と枕がくしゃっと転がっていた。

「伊吹くん……？」

そっと声をかけてみるが、返事はない。

靴を脱ぎ、部屋の明かりをつける。ガラんとした部屋には、伊吹くんの姿はなかった。

——まさか、もう帰ったの？

いや、そっちのほうが助かるんだけど、なんて思いながら、きょろきょろと大して広くない部屋を意味もなく見回す。

コップに水をついで一気に飲み干し一息つくと、食材を入れた袋をソファに置き、すぐに着替え始めた。

疲れた肩を解しつつ、お湯を沸かす。もう夜をむかえている。あんな若い子がこんな時間に出歩いて大丈夫かしら、なんて思いつつ、テレビをつけた。

チャンネルを適当にまわし、面白そうな番組に合わせる。と、そのとき、玄関のほうで音がした。はっと振り向いて、声をかける。

「伊吹くん？」

「あ……」

はっとしたように目をあわせた伊吹くんに、なんとなく不信感を覚えつつ、あたしは笑顔を作った。

「おかえり。どこか行ってたの？」

「——関係ない。……腹減った」

伊吹くんは一瞬逡巡するように目を動かしたが、すぐに突っぱねるようにそう呟いた。

呆れてちょっと顔を眺めちゃったけれど、気をとりなおして立ち上がる。今日はさすがに食材を買ってきたので、あたしはスーパーの袋を台所に置いて、食材を取り出した。在り来りではあるけれど、肉じゃがだ。

いもの皮を剥きながら、自分の手の中で転がるいもを見た。

「今日はちゃんと、ソファで寝てくださいね」

ソファの上に毛布と枕を置き、風呂上がりの伊吹くんに声をかける。昨日のように床で寝られて、風邪を引いてしまっただけは困る。

素直に顔を覆ったのを確認し、あたしも電気を消してベッドに入った。

暗闇に目が慣れて、ぼんやりと天井が見える。電気を消すと時間の感覚がなくなるせいか、どれくらい時間がたったのかわからなかったけれど、耳を澄ませば時計の音と共に聞こえる伊吹くんの寝息が、それなりに時間が経ったことを知らせていた。

頭の中で、自然とお金の計算を始めてしまう。一人暮らしの内ですら、お金はほんの少ししか残らなかったのに、食べ盛りの少年がひとり増えて、どれだけかかるのか予想もつかない。食費、光熱費だけでもぐんと増えるし、暮すのだから日用品も必要になる。

勢いで、楽しそうだななんて考えていたうちはよかったけれど、冷静に考えればものすごく大変なことなのだ。かといって、あの少年は一応強盗なのだから、追い出すわけにもい かない——というより、追い出せない。

薄ぼんやりと見える天井に向かってため息を吐き出せば、悩みが余計重たくなったような気がした。

今は月末でお金が無いけれど、切り詰めれば生活できないこともない。問題は来月からだ。まさかアルバイトしてくれとは言えない。

そんなことを堂々巡りで考えていたら、いつの間にか意識は暗がりの中、静かに落ちていた。